

# 東京音楽学校・東京美術学校の 「学徒出陣」の実態解明に向けて

——記録と記憶によるアーカイブズ構築のために——

橋本久美子

## はじめに

大学の歴史としての戦時下に、我々は今日どのように向き合えば良いのだろうか。東京音楽学校の戦時下については、演奏や作曲などの音楽的なシーンに音楽学校らしい特徴を読み取ることもできる。しかしながら学校と戦争との関わりを最も端的に表す出来事は、学生と教職員の応召であろう。学生が国家の任務によって学校を離れた時代があり、学生生活に空白ができ、命を落とした学生がいたことを、いかに史実として残し、伝えるか。戦時下の教育や創作も重要だが、目を逸らしてはならないことは、その時代に学び、教え、召集された人々の存在である。とくに在学中に出征し還らなかった人々は卒業名簿にも載らず、在学中の記録も僅かである。記録を渉猟して残しておかなければ、彼らの存在は記録からも人々の記憶からも消えてゆく。戦後に活躍した卒業生と同様、個人都合ではなく休退学した学生の存在もまた、大学の歴史に記録されて然るべきではなからうか。本稿は学生の応召に光を当て、戦没者については断片的な記録を捫り合わせ、氏名と把握できた足跡を残すことを試みる。

東京音楽学校における「学徒出陣」は、歴史的事象としては認識され、概要は『百年史』でも言及されている。だが具体的な人数や氏名の解明については長らく看過されてきた。卒業生への系統立ったインタビューは『百年史』編集の後も、近年では澤野立次郎氏が東京音楽学校の卒業生にインタビューした内容が音楽学部同窓会の「同声会報」に収載されている<sup>1</sup>。戦時経験者が減る一方で、戦時下が歴史研究の対象となっている現在、行うべきことは、東京音楽学校と東京美術学校の記録を新たに掘り起こし、戦時下の両校の横断的研究へと進むことではなからうか。

本稿は、東京音楽学校・東京美術学校の「学徒出陣」の解明を目的に、「音楽学部紀要第43号」で明らかにした、昭和18年11月15日出陣学徒仮卒業式の出席者に関する追跡調査の結果を提示、分析、整理し、戦時下の東京音楽学校と東京美術学校の実態把握に不可欠な基本情報を一次資料に基づき提示する。判明した戦没学生については在学中までの記録を載せる。

## 1. 「出陣学徒仮卒業式」に出席した暫定 49 名

東京音楽学校では昭和18年11月13日に「出陣学徒出演演奏会」を急遽行い、翌々日15日に「出陣学徒仮卒業式」を執り行った。式には二種類の学生が出席した。一方は、修業年限の過半を修了し、休学しても卒業となる学生、他方は復学して卒業すべき学生であった。彼らは全員入隊かと思われたが、実際は、必ずしもそうではなかったことが判明した。入隊したかどうかの判断は、復員や復学の届出があれば可能だが、それ以外は疑問が残る。「入営のため休学」と記載される者を入隊と暫定すると、46名である。ここでは即日帰郷も一旦入隊したと見做す。しかし49名中7名は入隊の形跡が明らかではない。49名中、戦没者として記録される3名は、昭和17年に予科入学し、本科声楽部1年で召集された伴直信、作曲部1年で応召された鬼頭恭一、村野弘二である。今のところ伴に関する情報は学内の記録のみである。復学や卒業の記録を含め、戦後情報の無いケースが6名、復員したが卒業記録もその後の活動形跡も把握できないケースが1名である。いずれもこれまで学友等への聞き取りから名前が語られてこなかったが、引き続き詳細を求めたい。朝鮮半島出身の山本錫太郎と宮本英男については、入隊と帰国いずれも情報収集中である。山本は昭和41年の同声会名簿に「大韓民国京城音楽学校」在職が記載され、宮本は、入隊のため文部省専門教育庁への照会に基づき「仮卒業」とあるがその後の情報は得ていない。宮本の本籍・平安道は北朝鮮に位置する。

昭和18年11月15日の仮卒業式後を追跡調査した結果が【表1】である。1～20の仮卒業生20名のうち、15名は入隊したと確認される。うち1名は即日帰郷である。他の5名は、現役免除、軍楽専習中に病気のため志願兵免除、判断可能な記録が確認できない等の状態を解決することができていない。また20名中16名の生還ないし戦後の活動が確認されている。4名については、戦死の記録や情報はないが、同声会名簿に卒業生として記載されず、演奏活動、教育活動、また本籍地を中心にインターネット検索を行なったが、戦後情報には繋がっていない。次に、表中21～32の予科と本科の12名である。2名が仮卒となっている。全員が入隊したと暫定するが、朝鮮半島出身者1名については判断材料が乏しい。内訳は、生還もしくは戦後が確認される8名、戦死3名、生死いずれの情報もない方1名である。次いで、表中33～48の甲種師範科16名である。入隊は15名と見ている。1名については入隊の事実確認に至っていない。戦死と判明した人はいないが、生死の情報が得られない1名、復員後に病気休学し、卒業した形跡もその後の情報も把握できない1名がいる。最後に表中49の邦楽科1名は入隊と生還が確認されている。49名の追跡調査の結果、入隊者43名、生還者40名、戦没者3名、不明者6名となった。

以下の20名は、仮卒業証書受領者である。表中の氏名が入学年度順でないのは、『昭和十八、九年度卒業式一件書類 東京音楽学校』に準じた結果である。『昭和十三年度本科入

東京音楽学校・東京美術学校の「学徒出陣」の実態解明に向けて

退学許可簿』に「仮卒業者ハ次官通牒発専二四一ニ依ルモノニシテ昭和十九年九月卒業セシムルモノトス」とあり、「注2」の「2-(1)」の規定に合致する。実際、表6番目の廣田幸夫の実家には本人出征中の翌年九月に卒業証書が送られてきたという<sup>2</sup>。

【表1】

	入学年度	氏名	学科種別	応召有✓/無	生還	戦没	その他情報
1	16	國枝誠也	本声	「出陣学徒」仮卒✓	✓	-	S18.12.15 解除「即日帰郷、休学取消」
2	16	萩谷納	本声	「出陣学徒」仮卒(✓)	✓	-	S19.9.1 解除「現役免除」
3	16	平田 愼一	本声	「出陣学徒」仮卒✓	情報無し	情報無し	S18.10-19.3 澤崎、貫名、Wucherphenigの授業時間表で氏名取消。応召と判断されるが、生還未確認
4	16	伊藤 信夫	本Org	「出陣学徒」仮卒✓	✓	-	S18.10-19.3 眞篠教官時間割で氏名取消。応召判断可
5	16	三瓶十郎	本Vn	「出陣学徒」仮卒✓	✓	-	S18.10-19.3 兎東永田教官時間割で氏名取消
6	16	廣田幸夫	本Vc	「出陣学徒」仮卒✓	✓	-	S 18.12.1 丸亀師団通信隊入隊。S 21.2.3 中支より復員
7	15	大橋幸夫	本Cl	「出陣学徒」仮卒	✓	-	S18.12.15 解除「令状未着 休学取消」 <sup>3</sup>
8	16	鈴木清三	本Ob	「出陣学徒」仮卒✓	✓	-	S20.8 月 24 日復員
9	16	山内幸男	本Ob	「出陣学徒」仮卒	✓	-	S16.5 横須賀海兵団軍楽科専習中病気のため志願兵免除とある。仮卒後の応召は未確認
10	17	朝一庸	A 甲師	「出陣学徒」仮卒✓	✓	-	S18.10-19.3 時間表澤崎田中規教官の担当取消
11	17	菅村央	A 甲師	「出陣学徒」仮卒✓	✓	-	S18.10-19.3 時間割酒井豊増教官の担当取消
12	17	平田勝	A 甲師	「出陣学徒」仮卒✓	✓	-	S18.10-19.3 時間表木下永井教官の担当取消
13	17	布施和郎	A 甲師	「出陣学徒」仮卒✓	情報無し	情報無し	S18.10-19.3 時間表酒井教官担当取消
14	17	前原忠夫	A 甲師	「出陣学徒」仮卒✓	✓	-	S18.10-19.3 酒井・貫名教官担当取消
15	17	増廣卓三	A 甲師	「出陣学徒」仮卒✓	✓	-	S18.10-19.3 時間表澤崎貫名岡田教官担当取消
16	17	三井 健	A 甲師	「出陣学徒」仮卒✓	情報無し	情報無し	S18.10-19.3 時間表木下教官の担当取消
17	17	安永武一郎	A 甲師	「出陣学徒」仮卒✓	✓	-	S18.10-19.3 時間表澤崎水谷教官担当取消
18	17	横谷英次	A 甲師	「出陣学徒」仮卒✓	✓	-	S18.10-19.3 時間表酒井岡田教官担当取消。戦後横谷瑛司として北海道で活躍
19	17	時澤鐵太郎	A 甲師	「出陣学徒」18.11.15 仮卒	情報無し	情報無し	S 18 年 9 月 8 日入営休学 S19.9.25 卒業。第二国民兵
20	17	杵家安廣	邦長三味	「出陣学徒」仮卒、(✓) S18.12.1 入営休学	✓	-	長唄唄方。杵屋喜三郎(15代)

以下、本科と予科の12名。『自昭和十三年度 本科入退学許可簿』『自昭和十三年度 予科入退学許可簿 教務課』による。

## 東京藝術大学音楽学部紀要 第44集

21	17	小田野正之	本 声	S18.12.1 ✓入営休学	✓	-	S20.9 復員
22	17	伴直信	本 声	S18.12.1 ✓入営休学	-	✓	S18.10-19.3 木下教官時間割氏名取消。 S 20.6.8 戦病死のため退学「入退学許可簿」
23	16	野間太郎 / 義弘	本 Vn	仮卒 ✓ S18.12.1 入営のため休学	✓	-	S19.6.1 解除、S20.3.31 召集解除*のため休学取消(2度目の召集記録は未詳)
24	17	岩井直溥	本 Hn	S18.12.1 ✓入営休学	✓	-	S20.10.13 復員
25	17	戸田士雄	本 Trb	S18.12.1 ✓入営休学	✓	-	S19.10.5 兵役免除、S18.12.15「解除、病気帰郷、休学取消」
26	17	大石清	本 Tub	S18.12.1 ✓入営休学	✓	-	S20.10.15 復員
27	17	鬼頭恭一	本 作	S18.12.1 ✓入営休学(海)	-	✓	S20.7.29 殉職
28	17	村野弘二	本 作	S18.12.1 ✓入営休学	-	✓	S20.8.21 戦死
29	16	山本錫太郎	本 Tp	仮卒*(、✓) S19.5 入隊(本籍地:朝鮮江原道華川郡) *S18.12.15 仮卒	✓	-	S41 同声会名簿「大韓民国京城音楽学校内」、「文部省専門教育局ニ問合ノ処仮卒ノ処理方電話ニテ打合せ卒業へ移ス」とメモ <sup>5</sup>
30	18	浅香淳	予 声	S18.12.1 ✓入営休学	✓	-	S18.10-19. 3 時間表澤崎・貫名教官の担当取消。S20.10.6 復員同月 31 復学、23.2.2 病気休学、23.12.14 休学取消
31	18	宮本英男	予 声	S18.12.1 ✓入営休学(本籍地:平安南道安州郡)	情報無し	情報無し	S18.10-19. 3 木下教官の担当取消。「自昭和十三年度本科入退学許可簿」の退学者欄に氏名あるが決裁不詳
32	18	新島弘	予 Fag	S18.12.1 入営✓	✓	-	S18.10-19. 3 時間表金子教官担当取消。S19.9.2 兵役免除のため休学取消、暁部隊学徒動員、S19.9.26 現役免除休学取消

## 以下、甲種師範科 16 名。『自昭和十三年甲師入退学許可簿』

33	17	橋本喬雄	A 甲師	仮卒業:昭 19/2/10 (中部第四十六部隊*) *『自昭和十八年度至昭和二十年度公文書綴教務課』	✓	-	S18.11.15 仮卒氏名記載後取消、S19.1.31 付仮卒業証書授与、S19.2.10 即日帰郷、2.11 就学、S19.9.25 卒業
34	17	飯島一夫	B 甲師	S18.12.1 ✓入営休学	✓ 戦後 情報 無し	-	S18.10-19. 3 澤崎貫名森教官の担当取消。S21.1.24 復員復学、22.1.15 病気休学、22.3.10 復学、卒業記録無し
35	17	川島正二	B 甲師	S18.12.1 ✓入営休学	✓	-	S18.10-19. 3 時間表酒井・萩原教官の担当取消。「S18.12.1 熊第 9216 部隊入営、S 20. 8.18 日付召集解除」9.26 復員
36	17	佐藤一夫	B 甲師	S18.12.1 ✓入営休学	✓	-	S18.10-19. 3 澤崎・田中・小林規教官の担当取消。S20.8.31 復員、10.31 復学
37	17	篠原正敏	B 甲師	S18.12.1 ✓入営休学	✓	-	S18.10-19. 3 時間表澤崎・貫名・小林教官の担当取消。S20. 11.28 復員、S 21.2.19 復学
38	17	渡邊今朝藏	B 甲師	S18.12.1 ✓入営休学(海)	✓	-	S18.10-19. 3 澤崎・小林・岡田教官の担当取消。「S18.12.10 海軍に入隊休学中の所 S 20.8.28 復員に付 20.10.4 より復学致度」S20.10.24
39	18	伊澤敬介	甲師	S18.12.1 入営✓	情報無し	情報無し	S18.10-19. 3 時間表 藤井田中規森教官の担当取消

東京音楽学校・東京美術学校の「学徒出陣」の実態解明に向けて

40	18	今井弘	甲師	S18.12.1 入営✓	✓	-	S18.10-19. 3 時間表で木下・高折教官の担当取消
41	18	葛西満郎	甲師	S18.12.1 入営✓	✓	-	S18.10-19. 3 時間表 藤井・萩原・森教官の担当取消。S18.12.1 応召により弘前北部 16 部隊入隊、S20.9.15 復員帰郷
42	18	川原浩	甲師	S18.12.1 入営✓	✓	-	S18.10-19. 3 時間表 酒井・貫名・山本正人教官の担当取消。S18.12.1 入営後 S19.9.10 病気の為除隊休学、S20.10.31 復学
43	18	木村信之	甲師	S18.12.1 入営（海）✓	✓	-	S18.10-19. 3 時間表 酒井・山本力教官の担当取消。S18.12.11 海軍入隊、S20.8.26 復員、20.11.14 復学
44	18	清野澄夫	甲師	S18.12.1 入営✓	✓	-	S18.10-19. 3 時間表 酒井・田中規・森教官の担当取消。S18.12.1 陸軍入隊、S20.10.20 復員、11.14 復学
45	18	駒ヶ嶺大三	甲師	S18.12.1 入営✓	✓	-	S18.10-19. 3 時間表 酒井・山本正人教官の担当取消。S18.12.1 日陸軍入隊、S20.9.10 復員、11.14 復学
46	18	前澤繁藏／ 田川繁藏	甲師	S18.12.1 入営✓	✓	-	S18.10-19. 3 時間表 藤井・萩原・山本正人教官の担当取消。S20.10.20 家事都合により退学
47	18	松平立行	甲師	S18.12.1 入営✓	✓	-	S18.10-19. 3 時間表 木下・貫名教官の担当取消。S18.12.1 陸軍入隊、S20.10.27 復員、11.1 復学、11.13 病気休学
48	18	柳 力	甲師	S18.12.1 入営✓	✓	-	S18.10-19. 3 時間表 藤井・萩原・森教官の担当取消 S18.12.1 陸軍入隊、S20.10.27 復員、11.1 復学

以下、邦楽科 1 名。『各科復学書類 昭和二十年度以降』『自昭和十三年度 邦楽科入退学許可簿』

49	18	早川 良一	邦楽 山田 流箏曲	S18.12.1 ✓入営休学	✓	-	召集解除復帰届「S20.9.4 召集解除」
----	----	-------	--------------	----------------	---	---	-----------------------

昭和 18 年 11 月に仮卒業式に出席したと見られる 49 名の所属は、予科 3 名と本科 18 名を合わせて 21 名、師範科 26 名、邦楽科 2 名となり、学科別に大差は見られない。在学中徴集は終戦間際まで続く。昭和 16 年 12 月の開戦以前の兵役、応召についての調査報告は稿を改めたい。

## 2. 統計結果と分析

### 2-1 東京音楽学校の男子学生——在籍者数、入隊者数、応召者数、徴集率、戦没者

東京音楽学校の学徒出陣を把握するにあたり、学籍簿のような長期的に同じ基準で作成された記録での確認ができない現状をお断りした上で、いくつかの集計結果を公表する。【表

2】は男子在籍者数、入隊者数、徴集率、戦没者である。東京音楽学校では、予科・本科が4年制、甲種師範科と邦楽科は3年制であった。そこで予科・本科は昭和13年度入学生から、師範科と邦楽科は14年度入学生から20年度入学生が対象となる。なお甲種師範科は昭和17年度に4年制か3年制を選択することとなり、翌18年度には規則改正により全て4年制となる。

【表2】

学科別	入学年度(昭和)	男子在籍者数	入隊者	徴集率	戦没者
予科・本科	13-20	172名	33名	19%	8名
* 19年度の予科入学には特別学生2名を含む					
甲種師範科	14-20	146名	34名	23%	3名
邦楽科	14-20	36名	9名	25%	0名
全科		354名	76名	21%	11名

## 2-2 東京音楽学校の学生——男女別在籍者数、男女比など

「学徒出陣」が行われた戦前の国立の高等教育機関のうち、女子の入学が認められていた機関として北海道帝国大学、東北帝国大学、九州帝国大学があるが、東京音楽学校では明治20年の創立当初より共学で、一貫して女子の方が多数を占めた。このことは同校の類例のない特色の一つでもあり、戦時下に男子が召集され激減した後は、女子が慰問演奏の担い手となり、学校に残された三八式歩兵銃の手入れも行っていた<sup>6</sup>。【表3】は、昭和16年12月から終戦までに在籍した男女学生の人数と人数比である。

この期間全体では、男子は女子の半分よりやや多い程度である(女子は男子の1.9倍)。男女の人数に最も開きがあるのは邦楽科で、女子が男子の3.5倍である。邦楽科を除くと女子は男子の1.8倍ほどになる。但し、表から見えない部分について補足すると、今日と大きく違うのは、大型管楽器は男子の独占領域で、作曲も男子が圧倒的に多かった。器楽の中ではピアノ専攻生の男女差が大きい(女子が多い)が、表の数字にはそうした専攻別の特徴は反映されていない。

【表3】

学科別	入学年度(昭和)	男子	女子	男女計	人数比 男子：女子
予科・本科	13-20	172名	302名	474名	36%：64%
甲種師範科	14-20	146名	266名	412名	35%：65%
邦楽科	14-20	36名	129名	165名	22%：78%
全科		354名	697名	1,051名	34%：66%

## 2-3 甲種師範科の入学者数と男女別人数

甲種師範科で注目されるのは戦争末期の変化である。師範科の男女学生数は年度によって増減はあるが、昭和17年度以降に注目したい。17年度は、従来の甲種師範科が3年制であったところ、新たに4年制のコースが併設された。通称「A師」「B師」と言われ、A師が3年制、

B師が4年制である。男子は3年制への入学が圧倒的に多く、女子は新設された4年制の方が多いのは興味深い。男子には師範学校等の卒業生が多かったことも背景にあらうか。17年度は入学生総数が極端に多い。19年度には男子が11名に激減する。20年度には男子がわずか4名であったが、その不足を埋めるだけの女子が入学する。男子の動向は、昭和18年の一斉入隊や徴兵年齢の引き下げとも関係があるのだろう。

【表4】

入学年度	男子	女子	計
14	24	28	52
15	25	30	55
16	26	29	55
17	A21 + B12	A21 + B26	80

入学年度	男子	女子	計
18	25	36	61
19	11	32	43
20	4	59	63

#### 2-4 東京美術学校の学生について——在籍者数、入隊者数と徴集率、戦没者と入隊後死亡率

【表5】は東京美術学校の予科・本科（5年制）と甲種師範科（3年制）の学生について、学籍簿に基づき調査を行なった結果である。学生一人ずつ、入学年度、氏名、読み、生年月日、出身地、卒業年度、入退学、兵役・入隊関係、その他参考情報を一覧表にし、そこから集計した。

【表5】

学科別	入学年度 (昭和)	在籍者 A	入隊者 B	$B \div A$	徴集率	戦没者 C	$C \div B$	入隊後死亡率
予科本科	12-20	1136名	507名	0.446	45%	77名	0.15	15%
甲種師範科	14-20	130名	53名	0.407	41%	4名	0.075	7%
		1266名	560名	0.442	44%	81名	0.144	14%

#### 2-5 東京音楽学校と東京美術学校の比較（昭和16年12月～20年8月）

両校で典拠となる資料が同種・同質ではないため、数字での比較がどこまで可能なのかという問題はある。しかし東京藝術大学の戦時下を知るには両校の比較対照は必須なため【表6】を作成した。東京美術学校については予科・本科が5年制なのに合わせ、昭和12年度から20年度までの学籍簿調査を想定していたが、始めてみると兵役や病気による休学や留年の人数が音楽学校とは比べものにならないほど多く、在学中徴集についても応召と解除を繰り返すことで卒業までの年数が長くなり、在学年数の長い学生については昭和5年度の学籍簿まで遡ることとなった。

【表6】

学校名	在学者	入隊者	徴集率	戦没者	入隊後死亡率	典拠資料
東京音楽学校	354名	76名	21% (0.214)	11名	14% (0.14)	願書、成績、入退学書類
東京美術学校	1266名	560名	44% (0.442)	81名	14% (0.144)	学籍簿、入学者名簿

男子学生数では美術は音楽の3.6倍であった。入隊者数も異なるが、差が顕著なのは徴集率で、美術は音楽の2倍である。戦没者数も大幅に異なるが、入隊後の死亡率は両校とも14%である。死亡率14%は果たして高いのか低いのか。他大学を参考にすると、例えば京都大学の調査報告では「全入隊者の5%弱が戦没した計算になる」<sup>7</sup>。九州帝国大学では昭和14年以降入学の正科生で「学徒出陣」した1441名について戦没者111名が確認され<sup>8</sup>、この部分だけ見れば8% (0.077) に相当する。東北帝国大学では昭和19年8月時点で954名の学徒兵が確認され、終戦までに千数百名に上ったとされる。また在籍中の戦没者80名が確認されるが、出征後に卒業した場合は含まれず統計的には不明としている<sup>9</sup>。東北帝国大学における入隊後の死亡率を上記の人数から些か強引に出せば8% (0.083) となる。音楽学校と美術学校の14%は、他の三大学と比べて異常に高い。専門学校と帝国大学とでは制度面で根本的な相違もあろうが、配属・派遣先に大差があるようには見えない。音楽・美術両校の学生の死亡率が高くなった事情はどのあたりにあるのか、さらなる分析を行いたい。世間では「音楽学校生は音感のおかげで入隊後も優遇され、戦死者も少ない」との漠然としたイメージを持たれてきた。もともと男子学生が多くないので、戦没者の人数のみ見ればたしかに少ない。だがそうしたイメージが、断片的な情報から作られてきたこと、失われたものの大きさに目を向けてこなかったことによるものであると言わざるを得ない。

### 3. 戦没学生

昭和16年12月から昭和20年8月の間の在籍者のうち戦没（戦死・戦病死・戦傷死・殉職を含む）と判明した11名について述べる。戸田盛忠、増成直政、葛原守、草川宏、長森一利、伴直信\*、鬼頭恭一\*、村野弘二\*、菊池恒、船山愛彦、詫間卒五のうち、「\*」印を付した3名は上の表に記載された方々である。戸田と増成は昭和16年12月に繰上げ卒業している。人により情報の多寡はあるが、入学年度、生年月日、本籍地、出身校、在学中の情報、入隊関係等を記す。一部ご遺族からの情報を含む。共通する典拠資料は、入学願書、教官ごとの授業時間表、昭和18年度同声会名簿<sup>10</sup>、演奏記録については『東京芸術大学百年史 演奏会篇第二巻』である。

#### 戸田盛忠 (1920-1945)

- ▶入学 昭和13年4月 予科入学（ピアノ） 昭和16年12月繰上げ卒業
- ▶生年月日 大正9年4月12日 東京都麻布区
- ▶出身校 日本中学校\*卒 [\*現在の日本学園中学校・高等学校]。入学前、ピアノを昭和5年4月より7年2月までパウル・ショルツ門弟の千々部貞雄に、昭和10年5月より12年8月まで掛谷保一に、12年9月より永井進に師事。声楽を昭和11年4月より掛谷保一に、

12年12月より藺田誠一に師事（入学願書による）

▶在学中　ピアノを4年間にわたり永井進に師事（授業時間表より）。演奏記録：昭和14年10月29日学友会第119回洋楽演奏会にて声楽部同級生・堀二郎のバリトン独唱の伴奏（ハイドン《四季》よりシモンの詠唱、グノー《ファウスト》より〈さらば故郷よ〉）、昭和16年2月16日学友会第130回洋楽演奏会にて声楽部同級生・今井正五のバリトン独唱の伴奏（R. シュトラウス〈あすこそは〉作品27の4、〈汝、わが心の冠〉作品21の2、〈よき人よ、今し別れぞ〉作品21の3）昭和16年12月の卒業演奏会ではショパン《バラードへ短調》作品52を演奏した。

▶入隊　昭和16年12月本科器楽部繰上げ卒業。昭和17年研究科入学。入隊時期不明。昭和18年3月「研究科第1学年試業成績」に「休学」、翌19年3月「研究科第2学年試業成績」も「休学（兵役）」、同声会事務局保管の名簿に昭和20年4月13日戦病死と記載がある。

▶その他　妹・戸田あや子氏より平成27年10月28日付で筆者の問合せに書簡が寄せられた。盛忠に関する部分を掲載する。「兄は繰上げ卒業の一番はじめ十二月の卒業生で、翌年の春（多分三月末）麻布三聯隊に入隊 — 体が弱く乙種合格でしたのに — そのあといつかわかりませんが満州へゆき、最後は中支から南支への漢口作戦の途中で戦病死と伝え聞いています。本当のことはその場に居合わせた方を探しても見当たらず、終戦後二、三年たつて遺骨を取りに増上寺へ母と二人でゆきましたけれど、中はからっぽだったと（何年かたつてお墓を綺麗に作り直した時に）作業の人がそう言っていました。でも私達は、魂は還っていると信じて毎年お参りしています。四月十二日が誕生日ですが、終戦の年の四月十三日に亡くなったとか（本当でしょうか？）青山墓地の桜が満開の中を姉\*と二人でいつも行っていました。兄は武蔵高校（七年制）の中学で数学など得意だった様ですが、なぜかピアノが大好きで、うちには燭台つきの黒いピアノがあり、昭和のはじめですのに、蓄音機、レコードなどあり、一番上の兄\*\*が椅子の上に立って指揮の真似をしている子供の時の写真もあったと思います。うちは上三人が兄、姉、私の五人兄妹で、盛忠さんは三番目、今とは時代が違いますから、本格的にピアノを始めたのは遅かったと思いますが、音楽学校へ入学出来た時は本当にとってもとても喜んで、そのあと学校生活はどんなに楽しかったことでしょう。何もかも豊富すぎる現代と違い、もっと素朴で純真な気持ちを音楽に持てたのではないのでしょうか。永井進先生が教授になられ、兄と田村宏さんがそのころのお弟子だったと思います。卒業演奏会や青年館で小鳥居尊子さん（栗本さん）<sup>11</sup>の伴奏をした時のこと、その他いろいろと私と仲のいいやさしい兄でしたから、思い出さない日はありません。戦後七十年、志半ばで戦地に散った若い沢山の人達は本当にかわいそうだったと終戦直後より今になって切実に思います。うちは終戦の年の五月廿五日の空襲で焼け出されて、兄の学生時代のものはわずかな写真以外残ってなくて、史料室にお渡しできるものがなくて残念です。」

筆者注：\*あや子氏の姉は、声楽家で東京藝術大学名誉教授・戸田敏子（1922-2015）、\*\*

長兄は外交官で第1回尾高賞を受賞した作曲家・戸田邦雄（1915-2003、本名：盛國）である。

増成政直（1919-1944）

- ▶入学 昭和14年4月 甲種師範科 昭和16年12月繰上げ卒業
- ▶生年月日 大正8年3月24日 群馬県多野郡鬼石町
- ▶出身校 昭和12年3月群馬県立藤岡中学校卒、同年4月武蔵野音楽学校入学（師範科）
- ▶在学中 理論のクラス授業は橋本國彦の担当。声楽を澤崎定之に、ピアノを永井進に師事。
- ▶卒業後 岩手県立盛岡中学校（現・県立盛岡第一高等学校）、岩手県立盛岡高等女学校（現・盛岡第二高等学校）に勤務。入隊時期未詳。甥の瀬古宏氏<sup>12</sup>によれば「政直は耳が良いので神奈川県内の陸軍通信隊に入隊した。輸送船で通信していて魚雷攻撃を受けたそうである。墓石に昭和19年7月31日ルソン島沖戦死、岩手師範助教授 陸軍一等兵26歳と刻まれている。」

盛岡中学校の教え子が「戦場から戻らなかった増成先生」を書いている<sup>13</sup>。「増成先生は蝶ネクタイをしめて、小意気であったから、ばんからな盛中には<sup>[マ マ]</sup>につかぬ不思議な存在であった。早速先生は獐猛な上級生の餌食にされた。先生は「盛中の校歌の曲は軍艦マーチなのに、君たちの歌っているのを聞くと、一部それと違っている。正しく歌うとこうなるのだ」と音楽の時間に軍艦マーチの曲通りに校歌を歌って私たちを指導された。それを伝え聞いた4年生の一団が、次の音楽の時間に音楽教室になだれこんできて、すさまじい勢いで先生を罵倒した。当時の5年生も私たちには怖かったが、4年生はむしろ気味の悪い学年であった。そのため、一体どうになってしまうのだろうと、私たちははらはらして見守っていたが、蝶ネクタイの小さな先生は4年生の巨漢を見据えながら「絶対に君たちは間違っている」と言い切り続けたのである。音楽といっても、今のように楽典や合唱曲は習わず、せいぜい基本的な和声程度<sup>[マ マ]</sup>を教わった程度で、そのほか何をやったかも覚えていない。日時は明確でないが、先生の入隊の壮行式のとき、小さい体を震わせて、段上で出陣の決意を述べられた姿が、わずかに私の記憶にある。真面目な先生であった。私の手元には、1年生の3学期に、先生が出された宿題の作文「大東亜戦争と音楽」が残っている」

葛原守（1922-1945）

- ▶入学 昭和15年予科入学（ピアノ） 昭和18年9月繰上げ卒業
- ▶生年月日 大正11年10月23日 広島県深安郡八尋村
- ▶出身校 東京府立第五中学校\* 在学中の昭和14年9月、東京音楽学校選科入学〔\*東京都立小石川高等学校を経て現・東京都立小石川中等教育学校〕
- ▶在学中 在学中の演奏記録には、校内奏楽堂で行われた昭和16年11月15日 第134回報国団演奏会で1学年先輩の中目徹のテノール独唱の伴奏（マスカーニ作曲歌劇《カバレリ

ア・ルスティカーナ》より〈アヴェ・マリア〉、トスティ作曲《挽歌》)、昭和17年11月29日第142回報国団演奏会に恩師の豊増昇の「伴奏」でフランク作曲《交響的変奏曲》を独奏、昭和18年9月25日本科器楽部(ピアノ)卒業。卒業演奏会では、ショパン作曲《幻想曲へ短調》作品49を独奏し、幸田奨学賞を授与された。研究科入学。昭和18年10月～19年3月の井口基成の担当時間表に葛原の氏名があるが消されている。橋本國彦に作曲の指導を受けていた。父は童謡作家で教育家の葛原齒(しげる 1886-1961)。

▶入隊 昭和19年3月応召、フィリピンで罹病し、昭和20年4月12日台北陸軍病院円山臨時分院にて戦病死。

▶その他 平成29年と30年の「戦没学生のメッセージ」を知って、「葛原さんの音がとてもきれいだった」(昭和16年3月甲種師範科卒業・滝沢美恵子氏)、「上野児童音楽学園に通っていた頃に葛原さんを見かけた」(昭和28年音楽学部入学・名誉教授・笠間春子氏)と思いが寄せられた。今回のイベントが、学生時代の葛原の姿を同窓生の記憶に蘇らせたのである。

#### 草川宏(1921-1945)

▶入学 昭和15年4月東京音楽学校予科(作曲) 昭和18年9月繰上げ卒業、研究科入学

▶生年月日 大正10年10月28日 長野県長野市

▶出身校 昭和14年私立明星中学校卒業

▶在学中 作曲を信時潔、下總皖一、橋本國彦、H.フェルマーに学び、昭和18年9月卒業、研究科入学、昭和19年度試業成績書類に挺身隊を示す印あり。昭和18年2月6日の第143回報国団演奏会で自作ピアノ独奏曲〈スケルツォ ト長調 急速〉〈ロンド 変ホ長調 稍速〉、卒業演奏会では《奏鳴曲イ長調》が、先輩の大島正泰により演奏された。『自昭和十八年十月至昭和十九年三月 時間表』では、フェルマーの木曜日の授業に「研一指 草川」、信時潔の金曜日の担当にも「研一 草川」とある。貫名美名彦の担当表にも「研一 草川」とある。

▶入隊 昭和19年6月15日入隊。昭和20年6月2日フィリピン・ルソン島、バギオ北部約50キロのボントック街道にて戦死。

▶その他 父・草川信(作曲)、伯父・草川宣雄(音楽教育)、従兄・草川啓(作曲)も東京音楽学校卒業生。昭和19年5月29日の日記に「高田信一氏より日響の来る楽季の一つ作品を提供して呉れぬかと云ふ以来の手紙を貰ひ、思はず武者振いをした」「一ヶ月以内にピアノスコア或ひは構想を見せて貰ひ度いと云つて来られた」とあり、「差し当り現在書きつ、ある交響曲「昭南島入城祝歌」のオーヴァテユアーを拡大して一つの独立せる楽曲とした物を出してみようとも考へて見たが、又、新たに交響詩を急いで書かうかと思つて居るか(以前から「カグヤ姫」の物語を組曲として現はして見ようと空想を練つて居るから)、兎に角どちらにしても明日学校にてフェルマー師に相談して見る事とする。何しろ曲か定期

演奏用楽曲として採用されるとなると、僕の初出世と云ふ事になるのだから、大いに慎重を期せねばならぬ。ともあれ先輩は有難いもので頭が下る気がする」と、文面からも草川の興奮が伝わってくる。草川に召集令状が届くのは、その三日後である。

平成29年の「戦没学生のメッセージ」の演奏会では、ピアノ・ソナタ、島崎藤村等の詩による歌曲が演奏され、同30年には佐藤惣之助作詞による交声曲《昭南島入城祝歌》(詩は『美術新報』昭和17年3月号に掲載)が遺されたヴォーカルスコアと管弦楽編曲スケッチに基づき、高橋宏治の補作編曲を経て蘇演された。

#### 長森一利 (1920-1943)

- ▶ 入学 昭和16年 予科入学(チェロ)
- ▶ 生年月日 大正9年1月20日 東京市深川区
- ▶ 出身校 昭和12年3月保善商業学校卒業、昭和15年中央大学専門部経済学部在学中  
昭和11年9月より東京音楽学校選科(昭和16年度入学書類による)
- ▶ 在学中 昭和16年度時間表より、チェロを平井保三に、ピアノを今井治郎に師事。予科入学前に通った選科在籍中の公開演奏会の記録が2件ある。昭和14年6月10日春季選科洋楽演奏会で、グリツツマッヘル<sup>14</sup>作曲《ハンガリー幻想曲》、昭和15年12月7日秋季選科洋楽演奏会ではフォーレ作曲《悲歌》《夢の後に》である。伴奏者等は不詳である。
- ▶ 入隊 昭和17年1月13日入営、昭和18年8月10日戦病死により除籍
- ▶ その他 廣田幸夫氏が同期のチェロ3名中、長森と山崎孟の戦没を証言され、継続調査中<sup>15</sup>。

#### 伴直信 (1923-1945)

- ▶ 入学 昭和17年 予科入学(声楽)
- ▶ 生年月日 大正12年1月1日 福岡県三井郡小郡村
- ▶ 出身校 昭和16年3月福岡県八幡中学校卒業。昭和16年4月より声楽を下八川佳祐に、同年同月よりピアノを西田寅雄に師事
- ▶ 在学中 声楽を木下保に師事(昭和18年10月から19年3月の授業時間表)。昭和18年11月13日の出陣学生出演「第49回報国団演奏会」にて、平井保喜《国守る》《平城山》《九十九里浜》、シューベルト《幻日》を梶原完のピアノによりバリトン独唱した。
- ▶ 入隊 昭和18年12月入営、休学、昭和20年6月戦病死

#### 鬼頭恭一 (1922-1945)

- ▶ 入学 昭和17年 予科入学(作曲)
- ▶ 生年月日 大正11年6月10日 名古屋市東区
- ▶ 出身校 昭和15年3月愛知県第一中学校卒業、昭和16年東京音楽学校選科に入学し作

#### 曲を細川碧に師事

- ▶在学中 作曲を信時潔、橋本國彦に、ピアノを水谷達夫に師事。
- ▶入隊 昭和18年12月10日大竹海兵団に入団。三重海軍航空隊、築城海軍航空隊、神町航空隊を経て霞ヶ浦海軍航空隊で、当時開発中の液体燃料ロケット戦闘機「秋水」の練習機での飛行訓練中の事故で殉職。昭和17年2月、ビルマで戦死した従兄・佐藤正宏に《鎮魂歌》を作曲。名古屋の実家は空襲で全焼、東京の佐藤家にあった楽譜と鬼頭が入隊中に所持したノート等現存。正宏の弟・正知は、鬼頭から築城で20曲ほど書いたと聞かされたそうだが譜面は未確認である。

#### 村野弘二 (1923-1945)

- ▶入学 昭和17年 予科入学 (作曲)
- ▶生年月日 大正12年7月30日 福井県福井市
- ▶出身校 昭和16年3月兵庫県立第一神戸中学校卒業
- ▶在学中 作曲を下總皖一、橋本國彦に、ピアノを永井進に師事。
- ▶入隊 昭和18年12月1日陸軍通信隊 中部第四十二部隊 (京都 伏見)に入隊。東京陸軍通信学校(神奈川 相模原市)を経て翌年11月フィリピン、マニラ上陸。20年8月21日フィリピン・ルソン島ブンヒヤンにて自決 (公報では8月10日戦死)。在学中の作品は《白狐》中「こるはの独唱」等一部を除き疎開先の福井で焼失、音楽学校入学前の作品が現存する。
- ▶その他 昭和23年7月10日戦死除籍 (「三月ノ教授会ニテ審議終了後再調査為メ」『昭和二十二年度 (本科) 入退学簿』)。父・村野貞朗の手記「弘二の死を知って」によれば、村野は多くのレコードを聴き、中学三年生頃から独学で作曲に熱中。近所に東京音楽学校出身のソプラノ歌手・小島幸が住んでおり、村野の作曲にも影響を与えたと考えられる。島崎藤村の詩による中学校時代の作品《小兎の歌》に「小島先生に」との献辞が記される。

#### 菊池恒 (1919-1945)

- ▶入学 昭和18年 甲種師範科
- ▶生年月日 大正8年12月11日 福島県安達郡荒井村
- ▶出身校 昭和15年3月福島県師範学校本科第一部第5学年卒業 入学書類に「第二国民兵」
- ▶在学中 昭和18年度の授業時間割表によれば、師範科1年生の音楽理論を担当したのは橋本國彦である。ピアノを田中規矩士、唱歌を酒井弘に師事した。
- ▶入隊 入学前に兵役歴あり。暁部隊学徒動員資料に「戦傷死」とあり。『自昭和十三年甲師入退学許可簿』に「昭和二十年 師三、退学 (死亡)」。

船山愛彦 (1925-1945)

- ▶入学 昭和18年 甲種師範科
- ▶生年月日 大正14年3月10日 東京市浅草区
- ▶出身校 第二東京市立中学校〔現・東京都立上野高等学校〕
- ▶在学中 昭和18年度の授業時間割表によれば、音楽理論を橋本國彦、ピアノを今井治郎、唱歌を藤井典明に師事している。暁部隊学徒動員の資料に「戦病死」と記載あり。『自昭和十三年甲師入退学許可簿』に昭和20年8月死亡退学となっている。
- ▶その他 同級入学の澁谷傳氏が平成28年に「同級生では船山と菊池が亡くなった」と証言。

詫間孕五 (1923-1946〔届出〕)

- ▶入学 昭和19年 予科入学（作曲）
- ▶生年月日 大正12年12月22日 東京都麻布区
- ▶出身校 昭和16年12月東京府立第一商業学校卒業（現在の東京都立第一商業高等学校）、昭和17年4月私立国立音楽学校入学
- ▶在学中 昭和20年度時間表に「本科2年詫間」と記記され、細川碧が作曲を、外狩仲一がピアノを担当する予定だったようだ。19年度の時間表は確認できない。
- ▶入隊 昭和19年8月31日入営のため休学、昭和21年12月23日戦死により除籍、「戦死届 昭和21年12月23日 水谷達夫」(『各科 復学願書 昭和二十年度以降』)。学年担任であった水谷が連絡を受け、学校に届けたのだらうと同期作曲部の武田喜久子（旧姓寄藤）の言。
- ▶その他 東京音楽学校入学後、5ヶ月足らずで入隊した詫間については、同期生の記憶も希薄である。前出の武田喜久子は「名前も顔も覚えているが、入学して間もなくいなくなった」。都立第一商業高等学校でも卒業が確認されるのみである。国立音楽大学校史資料室では松浦淳子室長のご協力により何も記入されない状態の学籍簿が確認されている。

おわりに

「出陣学徒仮卒業式」の出席者暫定49名についての追加調査より、入隊や復員の状況が少しずつ明らかになった。5種類の統計を提示した。東京音楽学校の男子学生の在籍者数、入隊者数、徴集率、戦没率が試算され、男女別の学生数や比率についても、暫定だが具体的に数字で可視化することができた。東京美術学校の学生1266名に関する学籍簿の悉皆調査とデータ化はおそらく初めてであろう。今後は学年ごとや専攻ごとの特徴などを把握し、調査を蓄積する予定である。音楽と美術両校の比較検討も可能になろう。本稿掲載の戦没者11名以外についても追跡調査を行う。戦没学生という言葉は、一人一人の人物像を描くこ

とができて初めて実体あるものとなる。戦後70年も過ぎて戦没学生を掘り起こすことには限界がある。甚だ効率の悪い調査である。だが、学生を戦争で失った事実を大学が公的に記録し、負い続け、記録と記憶のアーカイブ化を行うことで、大学の歴史の重大な欠落がいくらかでも取り戻されるのではなかろうか。

本稿は、JSPS 科研費 JP16K03039「戦時下の芸術専門教育—東京音楽学校の事例を中心に」の助成による記録調査、現地調査、研究会、シンポジウム、演奏会を通してまとめられた。研究分担者は西山伸（京都大学）、折田悦郎（九州大学）、大角欣矢（本学）の各氏、研究協力者は澤和樹（本学）、佐藤道信（本学）、永田英明（東北大学、H29より東北学院大学）の各氏である。基礎調査には、大河内文恵、鳥谷部輝彦、仲辻真帆、金持亜実各氏の協力を得た。大学史史料室教育研究助手の澤原行正と吉田学史両氏は、演奏や展示のため、楽譜等資料の情報整理、デジタル化、演奏譜作成に携わった。戦没学生（草川、葛原、鬼頭、村野）の作品は、東京藝術大学創立130周年記念スペシャルイベント「戦没学生のメッセージ」のコンサート（2017/07/30）で演奏され、「戦没学生のメッセージII」（2018/07/29）では当時の教師4名（信時潔、橋本國彦、細川碧、下總皖一）の作品も紹介された。開催費用はクラウドファンディングにより賄われ、プロジェクト代表とコンサートの制作を大石泰演奏芸術センター教授が務めた。著作権処理の完了したコンサート映像は藝大ミュージックアーカイブ <http://arcmusic.geidai.ac.jp/8371> より公開されている。ご遺族より提供された楽譜等の画像についても音楽学部大学史史料室のホームページ <https://archives.geidai.ac.jp/> より公開を進めている。ご遺族のご厚意、複数の支援や公表の機会に助けられたことに感謝申し上げます、今後も調査の継続を基本に据えたい。

## 注

1 澤野立次郎氏による卒業生インタビュー掲載は下記の通り。

- ▶ 「【対談】戦時中2人の東京音楽学校生徒が辿った道：伊藤榮一先生、林祐次先生往時を語る」（『同声会報』No.4、平成16年12月 pp.8-12。「同（その2）」No.5、平成17年7月、pp.18-23。「同（その3）」No.6、平成17年12月、pp.7-11。「同（その4）」No.7、平成18年7月、pp.20-24。「同（その5）」No.8、平成18年12月、pp.13-17）▶ 「【対談】戦時中2人の音楽学校女生徒が辿った道：青山繁子先生、小松多鶴様 往時を語る」（『同声会報』No.9、平成19年7月 pp.11-16）▶ 「【同声会暦貼り】畑中先生、青春の日を語る（1）」（『同声会報』No.11、平成20年7月、pp.12-18。「同（2）」No.12、平成21年8月、pp.10-17。「同（3）」No.13、平成22年8月、pp.11-18）▶ 「【同声会暦貼り】川崎優先生、広島で被爆」（『同声会報』No.14、平成23年8月、pp.9-16）▶ 「【同声会暦貼り】吹奏楽にポップスの風 岩井直溥が40周年ベスト盤」（『同声会報』No.15、平成24年8月、pp.11-18）▶ 「【同声会暦貼り】伊藤京子先生語る東京音楽学校時代」（『同声会報』No.16、平成25年8月、pp.11-

- 18) ▶「【同声会暦貼り】大中恩先生が語る東京音楽学校時代」(『同声会報』No.17、平成26年8月、pp.11-18) 下線筆者。
- 2 内閣は、昭和18年9月21日の閣議において兵役法で規定していた在学徴集猶予制度を中止し、満20歳以上の男子を学籍に有るかどうにかかわらず兵として徴集することを決定し、10月1日に在学徴集延期臨時特例を公布し、即日施行した。この勅令を承け、文部省は10月19日付発専241号で以下の指示を全国の高等教育機関に出した。
- 1) 入営(陸軍)、入団(海軍)に至るまでは本人の便宜を考慮し重点的に教育すること。
  - 2) 入営、入団する学生に対して服役中(徴兵中)は休学とすること。
    - (1) 大学、予科、高等学校、専門学校の学生で明年9月卒業の見込みある者については、仮卒業証書を授与し、明年9月に卒業させること。
    - (2) 上記以外の学部学生については、除隊後復学する場合、休学時の学年に復学させ、予科、高等学校、専門学校の学生については上級学年に復学させること。
  - 3) 休学期間中は授業料等を免除すること。
  - 4) 入営、入団する学生について学籍簿のほかに徴集者名簿を作成すること。
  - 5) 以上のことは学則の定めにかかわらず実施すること。

(『学徒動員・学徒出陣：制度と背景』(福間敏矩；第一法規；1980年)から要約)。

東京藝術大学音楽学部では、戦時下の学籍簿も「徴集者名簿」も確認されていない。『入退学書類』にある、入営、病气等の事由、召集解除や復員等の記載等から情報収集するが、記載は不完全である。
- 3 大橋の名前は、『自昭和十八年十月 至昭和十九年三月 時間表』の北爪のクラリネットのレッスン時間表に「本二 大橋」と週2回記され、この時期には通学していたことが窺われる。
- 4 『自昭和十三年度 本科入退学許可簿』には山本錫太郎はS18.12.15 仮卒と記載されることから、11月15日の仮卒業式への出席については疑問が残る。
- 5 『昭和十三年度本科入退学許可簿 教務課』より(本史料には昭和21年まで記載されている)
- 6 昭和18年邦楽科に入学した山階弥次氏の証言による(平成28年8月18日)
- 7 西山伸「〈記録〉企画展「京都大学における「学徒出陣」」の開催」(『京都大学大学図書館研究紀要』第5巻(2007) pp.97-107) p.105  
[https://repository.kulib.kyoto-u.ac.jp/dspace/bitstream/2433/68866/1/kua5\\_97.pdf](https://repository.kulib.kyoto-u.ac.jp/dspace/bitstream/2433/68866/1/kua5_97.pdf)
- 8 『九州大学百年史 第1巻：通史編I』(九州大学百年史編集委員会 2017-03-31) p.732  
<http://hdl.handle.net/2324/18-1084>  
[https://catalog.lib.kyushu-u.ac.jp/opac\\_download\\_md/1801084/chapter\\_5-3.pdf](https://catalog.lib.kyushu-u.ac.jp/opac_download_md/1801084/chapter_5-3.pdf)
- 9 小幡啓介、曾根原理、永田英明「展示記録 東北大生の戦争体験」(『東北大学史料館紀要』第11巻(2016) pp.51-92) p.64 [https://tohoku.repo.nii.ac.jp/?action=repository\\_uri&item\\_id=52091](https://tohoku.repo.nii.ac.jp/?action=repository_uri&item_id=52091)
- 10 同声会は東京音楽学校および東京藝術大学音楽学部同窓会の名称で、明治29年に発足した。戦前の名簿は昭和18年に発行されて中断し、昭和24年に復刊した。事務局が保管する昭和18

東京音楽学校・東京美術学校の「学徒出陣」の実態解明に向けて

年の名簿は、次の名簿のための原稿として戦時下の情報が書き込まれている。卒業生の情報を学内の資料で把握することは困難なため、同声会名簿の書き込み情報による。

- 11 栗本尊子（旧姓小鳥居、1920.5.9）は戸田と同期入学の声楽家（メゾ・ソプラノ）。二期会名誉会員であり、平成 29 年文化庁長官表彰被表彰者に選出された。
- 12 増成政直は 8 人兄弟姉妹の第六子、五男。情報は長姉澤（さわ）のご子息・瀬古宏氏への電話取材による（2018/9/26）。
- 13 盛岡中学校を昭和 20 年に卒業した増田眞郎執筆による「戦時下の盛岡中学」が 2003 年 6 月 17 日から 2004 年 8 月 3 日まで、60 回にわたって盛岡タイムスに連載され、8 回目に増成が取り上げられている。執筆者は昭和 20 年卒業生の増田眞郎氏。 <http://morioka-times.com/topics/bungei/senjika/senji8.html>
- 14 フリードリヒ・グリュッツマッハー Friedrich Wilhelm Grützmaier (1832-1903) ドイツ、*Fantaisie Hongroise op. 7*
- 15 山崎についてはまだ証言のみである。他方、本稿入稿後、昭和 18 年 9 月甲種師範科卒で沖縄女子師範部助教授の東風平恵位（こちんだけい）の戦没情報を、東風平の資料閲覧のため大学史史料室に見えた演出家・富士川正美氏より頂き、調査を開始した。東風平はひめゆり部隊を引率し、昭和 20 年 6 月 19 日第三外科壕で米軍のガス弾により生徒 37 名とともに死亡した。作品に《想思樹の歌》（太田博陸軍少尉作詞）がある。

## **Analyzing the Circumstances Surrounding Students from The Tokyo Academy of Music and The Tokyo Academy of Fine Arts Being Sent to World War II: For the Purpose of Recording and Archiving**

HASHIMOTO Kumiko

Research has been conducted on a variety of musical aspects of performances and compositions, as well as the state of education, at The Tokyo Academy of Music in relation to World War II. However, a much more direct connection that could be studied, between the school and war, would be the recruitment and enlistment to the army of both the student body and the teaching faculty. The historical reality of students being separated from their school to serve their country at war, students' daily activities being interrupted, and students losing their lives needs to be preserved and transmitted to future generations. Those students and teachers, from The Tokyo Academy of Music, who were called to arms, especially those students whose names are not recorded on the graduation lists due to never returning from war, have been generally overlooked by researchers. Even the records of these students attending school are scarce at best. If nothing changes, these students' existence will disappear from all records and be completely lost to time. Therefore, as an essential addition to the history of this school, the same attention and recognition needs to be given to those students who died in battle, whose deaths remain unclear, as well as graduates active after the end of the war. This paper focuses on those students who were called to join the war effort, and documents 11 students' names and general information on school life who died in battle.

In Bulletin No. 43, 2018/03 for the faculty of music at The Tokyo University of the Arts, the author of this paper tentatively recorded the full names and positions of 49 attendees to the provisional graduation ceremony for those students departing for the war front on November 15th, 1943. This paper will expand on that research and reveal the situation of the students' enlistment and demobilization, as well as the results from a variety of studies. For example, the percentage of enrolled boys at The Tokyo Academy of Music that were voluntary enlistments, forced recruitments, as well as killed in battle after enlistment has been surveyed. This paper confirms that there were twice as many boys as girls making up the total student body. An examination and digital archiving of the school's registry has been conducted on the student body of The Tokyo Academy of Fine Art for the first time. From these results it has been confirmed that there were 3.6 times more male students within the art school than the music school. Furthermore, twice as many art students were recruited than music students. However, 14% of the students from both the art and music school died in war. From this point forward the goal is to clarify the number of student in each academic year, majors

and distinctions. For the first time it is possible to draw a picture that reveals the characteristics of each student that died during the war. Unearthing and clarifying students who died during the war 70 years ago will not be easy. However, the university needs to publicly record the lost reality of students caught up in the war. If the university continues to take on the responsibility for the recording and archiving this information, what has been historically lacking can finally be repleted.